

埼玉県東部方言の音韻の性格

—— 母音の問題を中心に ——

吉 田 健 二

(本稿のキーワード：埼玉県東部の方言，連母音の融合，母音体系の変化，共通語化)

0. はじめに

埼玉県方言は音韻の面において東北方言的な栃木・茨城県方言と利根川を境に接しており，そのうち荒川以東の東部地域は，共通語に似た西部地域と東北的地域との中間的な性格を持つ「緩衝地帯」とされている（金田一春彦1943）^①。また，その後の報告では，東北的音韻と東京的音韻の境界は現在の利根川のみによっているとは言えず，音韻分布によっては，むしろ古利根川が大きな障害であった可能性があるとも言われている（井上史雄・加藤正信1970）。

そこで本稿では，利根川を挟んだ地域の音韻現象分布の実態を捉え，さらに「緩衝地帯」とはどのような性質と考えるべきなのかを明らかにするために，埼玉県東部の高年層の言語調査に基づき，利根川西岸の地域の言語における音韻の性格と地理的分布を考察する。今後引き続き，利根川東岸及び荒川流域の調査を行い比較考察する予定であり，そのための足掛かりとしたい。

埼玉県東部地域は元来，利根川・荒川（現在の古利根川・元荒川）をはじめとする大小河川のもたらす洪水の被害にさらされてきた低湿地帯であった。江戸から大正時代にかけての二大河川の流路の改変（小野文雄1971 p.130～等を参照）によって，ようやく米作地帯として発達してきたが，戦後，東武伊勢崎線沿線を中心として都市化が進み，現在は東京のベッドタウンとしての役割が強まってきている。

今回は連母音の問題と合わせて，母音体系の変化およびその音韻論的解釈の問題について考察し，次のような結論を得た。

- ① 従来言われているよりも，動詞語幹に連母音の融合が起こりやすい。
- ② 連母音の融合変化の完了の遅速がこの地域の母音体系の年齢差となって現れている。
- ③ 母音単独の拍においても /i/ /e/ の別を認めるべきである。
- ④ この地域の古い音韻現象分布の後退を支配する要因が以前より問題となっていたが，現在の分布の決定要因は河川などではなく，交通路，具体的には東武伊勢崎線を中心とした都市化の進行であることが確認された。

1. 調査概要

1. 1 1990年10月より1991年9月にかけて、埼玉県57地点、茨城県3地点、千葉県3地点の計63地点で、音韻・アクセントの調査を実施した。各市町村の教育委員会、市史編纂室等の方々にご協力いただき、土地生え抜き、60歳以上の話者66名（男52名女14名、4名が50歳台、1889～1938年生まれ、平均生年 1917.0年）に面接調査をさせていただいた。地点の分布は明治28年の行政区分における市町村単位⁽²⁾の調査を原則としたが、徹底することは難しかった。調査は絵を使用した「なぞなぞ式質問」によるが、話者が改まってしまい、共通語（的）語形を答えることが多かったので、誘導によって方言的語形（音形）を引き出すこともあった。

1. 2 本稿に関わる調査項目及び問題点

(1) /i/～/e/ の混同（母音単独の拍で） 語頭 板 糸 枝 海老（指）

語尾 鯛 苗

(2) /i/ の中舌性（CV拍で）

子音間 北

語尾 蛇 指 海老

(3) 連母音の融合

[1] /ai/ /ae/

[2] /oi/

これらについて、① /ai/ と /ae/, /oi/ と /oe/ は等価と言えるか、② /ai/ /ae/ 対 /oi/ /oe/ の音韻的対立（金田一1943）はあるか、③ 語彙による融合形の現れやすさ、分布地域の広さの違い（井上史雄1984）はないか、等の問題がある。そこで下記のように語彙の性質別に調査項目を用意した。

| | /ai/ | /ae/ | /oi/ |
|------------|--------------------------|---------|----------|
| 形容詞・助動詞の語尾 | 短い 暗い 死なない | | 黒い 白い 強い |
| 動詞語幹 | 入る | 帰る こさえる | |
| 体言 | 大根 財布 蚕 鯛 ⁽³⁾ | 蠅 苗 | |

[3] /ui/ 古い 暑い 寒い

④ 中舌母音の [i] を有する地域では [i:] となる（金田一1974）。⑤ スイ、ツイに限って「スー」「ツー」という地方がある（金田一1943、大橋勝男1974）⁽⁴⁾。

[4] /ie/ 見える 消える

2. /i/ と /e/ の問題

2. 1 母音単独の拍における /i/ と /e/

語頭においては [e～ɛ₁] が優勢であり、[i] は少ない。[i] は共通語の音声を答えたものと思われ、同一の個人で「板」= [eta], 「糸」= [ito] のようにゆれを示す場合もある。規範意識が働いたかどうかによって発話ごとに変わってくるようで、高年層でも共通語の影響は強く、かなりのインフォーマントが共通語の知識によって [i] を使う。しか

し、例えば越谷市大松(5689.42)の元教員の女性(1905生)は「板」が「いた」なのか「えた」なのか分からないという。また、/ai/、/ae/ の非融合形の語末にはどちらにも [e~e] と [i] が現れ、本来 /i/ と /e/ の合流している方言であることを思わせる。

ところが、「海老」「指」は [ibi~ibi] という音形を取ることが少なくない。類似の音形は飯豊毅一(1984b p.13)にも報告されている。/VCV/ という構造の語の場合、前後の母音が近いものは同じ母音に変えて発音を容易にしようとする、という音声学的説明も可能だが、ともかく母音単独では全て [e] ということにはならない。これを異音(allophone)として処理し、/i/ /e/ は母音単独では完全に合流しているとすべきか、それとも /i/ /e/ 両方を立てるべきかという問題は連母音の所で一緒に考えることとする(3.3 参照)。

2.2 CV 拍における /i/

中舌化した [i] が多くの地点で聞かれる。例として「指」(地図1)を挙げる。音韻環境については、子音間よりも語尾の方が [i] が現れやすい。調音器官をゆるめたままにすることが許されやすいからであろう。金田一(1943, 1953)の指摘する、[ia] のような、語尾のみに現れる二重母音の調音がやはり観察されたが、このことも語尾に [i] が現れやすいことと関連していよう。また、「梨」は「蛇」「指」に比べて [i] が現れにくかった。母音が中舌化すると子音が [ʃ] から [s] へと近づき、子音の口蓋化の弱さが目立つため避けられやすかったのだと思われる。「梨」等の [si] は、大橋(1974)によれば茨城以北では見られる音声であり、その地域と埼玉県東部との差異は両地域の拗音脱落の起こりやすさの違いと関係しているのではないだろうか。

3. 連母音の融合

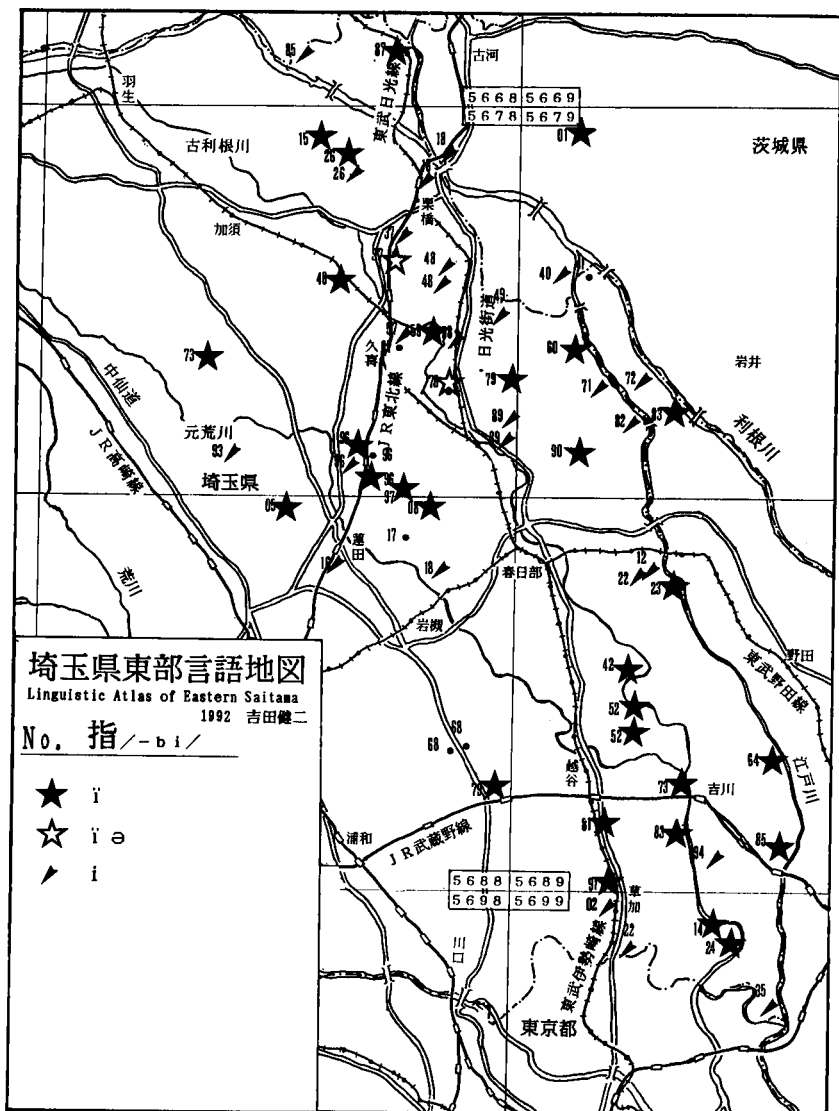
3.1 /ai/ /ae/ と /oi/ /oe/

3.1.1 語彙による差など

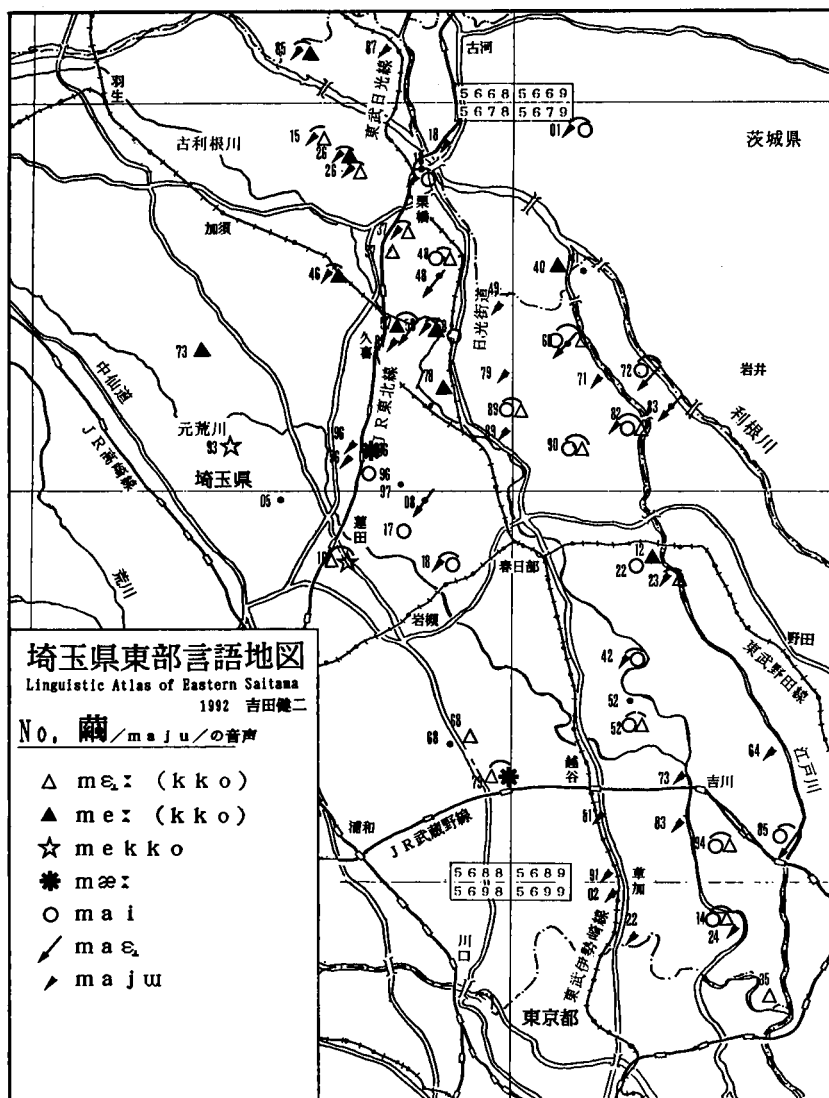
【表1】各語別の、融合形の現れた地点の全体比⁵⁾

| 語 | 融合率 | 連母音 | 語 | 融合率 | 連母音 | 語 | 融合率 |
|------|-------|-----|----|------|-----|----|---------|
| 帰る | 91.1% | ae | 暗い | 68 | ai | 白い | 41.0 oi |
| 入る | 90.6 | ai | 財布 | 62.1 | ai | 黒い | 11.3 oi |
| 大根 | 90.3 | ai | 粥 | 61.4 | ai | 蚕 | 9.6 ai |
| 蠅 | 78.0 | ae | 苗 | 56.9 | ae | 鯛 | 5.1 ai |
| こさえる | 77.2 | ae | 強い | 54.5 | oi | 鮎 | 0 ai |
| 短い | 70 | ai | 薺 | 49.1 | ai | | |

井上(1984)には、〈形容詞～動詞語幹～名詞～動詞活用語尾〉の順で融合形が現れやすいとあるが、この結果によれば、形容詞活用語尾よりも、むしろ動詞語幹の方が融合が盛んである。また、/ai/、/ae/ と比べて /oi/ はやはり融合形が出にくい。「黒い」が特に低いのは調査時に「暗い」と比較してどうか、いう尋ね方をしたためであると思われる。名詞が高率のものから全く融合形がみられないものまでさまざまであるのは、その語の使用度や、生活上身近であるかどうか(馴染み度)が要因のようだ。「大根」や「苗」が



比較的高率なのは、農業地域という特徴を反映していると考えられる⁽⁶⁾。これに対して、県下では秩父地方が中心で、東部では盛んにならないまま衰退した養蚕（新井寿郎1964参照）についての語彙はそれに比べて低い。ただし「繭」は、正月の行事で柳の枝に刺す



1 : 357,000

〔地図 2〕

「蘭玉団子」の場合だけに融合形が残っている場合も含めたため、比較的高率になっている（地図 2）。また、「鮎」は低平地のこの地域ではもちろん見られない魚であるため、「ハヤ」という魚と勘違いしたり、「そんな魚はみたことがない」という反応もあった。

したがって、融合形が全く現れないのも当然であろう。

3. 1. 2 音声的変異

融合形の長母音で標準的な [ɛː] の他に、狭い [e:] が多く現れることは短母音の場合と同じである。/eR/ として問題ない。さらに /ai/ /ae/ に限り、一部の話者に /oi/ /oe/ におけるものより広い母音—[e~æ] 及びそれを含む二重母音—が聞かれる（例、地図 3：入る）。

〔例 1〕白岡（5678.96）男（1899 生）：表 2 の A

暗い [kuɪfæna] / 帰ってくる [kæːttekufu]

吉川町中井（5689.64）男（1907 生）：表 2 の F

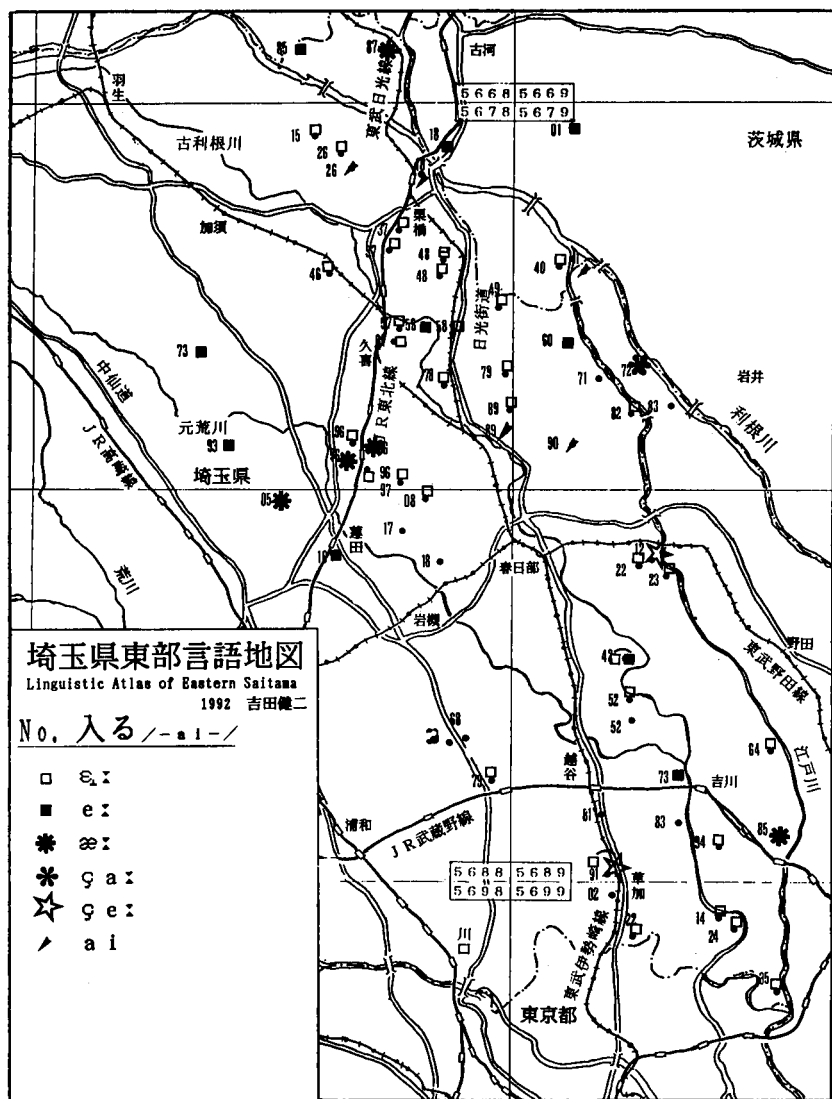
飲んだこともない [neasi]

この音声の存在により、1.2 の（3）の②の問題点、/ai/ /ae/ vs /oi/ /oe/ の対立がある話者は 66 人中 10 人ではあるが確認されたことになる。これを年齢順に並べ、[e~æ] が聞かれた語を○で示すと【表 2】のようになる。（表には 11 語しかないが、/ai/ /ae/ のある語は 1.2 の（3）の②の表にある 15 語）

【表 2】/ai/ /ae/ の融合形に [æ~ɛ] の見られたインフォーマント

| 地点番号 | 地 名 | 性 | 生年 | [æ~ɛ] の出現 | | | | | | | | | | 合 計 | この生 年まで の話者 数の累 計 ⁽⁷⁾ |
|-----------|---------|---|------|-----------|--------|------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--|
| | | | | 入 る | 帰 る | こ さ え る | 暗 い | 短 い | 大 な | 財 根 | か 布 | ま ゆ | 苗 ゆ | | |
| A 5678.96 | 白岡町白岡 | 男 | 1899 | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | | | 5 | 1人 |
| B 5689.85 | 三郷市早稲田 | 男 | 1906 | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | | 7 | 6人 |
| C 5678.96 | 白岡町小久喜 | 男 | 1907 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | 8 | 10人 |
| d 5678.78 | 杉戸町下高野 | 男 | 1907 | | | | | | | ○ | | | | 1 | 〃 |
| E 5699.35 | 三郷市高須 | 女 | 1907 | ○ | | | | | ○ | | | | ○ | 3 | 〃 |
| F 5689.64 | 吉川町中井 | 男 | 1907 | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | 3 | 〃 |
| g 5688.17 | 蓮田市笹山 | 女 | 1917 | | | ○ | | | | | | | | 1 | 24人 |
| h 5688.05 | 伊奈町小室 | 男 | 1915 | ○ | | | | | | | | | | 1 | 30人 |
| j 5668.87 | 北川辺町向古河 | 男 | 1917 | ○ | | | | | | | | | | 1 | 36人 |
| j 5688.79 | 浦和市大門 | 男 | 1918 | | | | | | | | | | ○ | 1 | 37人 |
| | | | | 7 | 4 | 3 | 3 | 1 | 3 | 4 | 2 | 1 | 2 | 1 | |

d, E, F の話者は [ɛ] を有していると思われる。金田一（1943）で /ai/ の音声としてこの音声は報告されているのは、[ɛ] の他の（ここに報告したような）音声的変異もある中でこれが代表として取り上げられたものと推測する。表 2 の如く、[ɛ~æ] を持つ話者は今回の調査の中で最高年の方々が中心で、またその中にも年齢差がある。特に出現数の多い A~F の話者に限れば、1907 年生まれまでの 10 人のうち 5 人に [ɛ~æ] が聞かれることになる。この傾向からすると、[ɛ~æ] の出現を左右する要因として、〈年齢〉が大きく関わっているのではないかとと思われる。傍証として、同一地点における世代差の例を下



1 : 357,000

[地図 3]

に挙げる。

[例 2] 庄和町中野の「入る」の音声 (地図 3 5689.12)

| 調査者 | 性 | 生年 | 調査年 | 音声 | 解釈 |
|------|----------|------|------|-------|------------------|
| 大橋勝男 | (1974) 女 | 1904 | 1969 | ɕja:- | *h+æ:- ~ *h+ja:- |
| 吉田健二 | (1992) 女 | 1933 | 1991 | ɕe:- | *h+e:- |

[58]

7

「ヒャール」は大橋(1974)によると、千葉・茨城などで「ヘール」の中にポツリポツリ分布する。埼玉県内ではこの他、上尾市平方や大石等にも見られる現象ということで、各地で個別に起こり得る現象らしい。約30歳の年齢差があるが、「は」の子音[h]が口蓋化されて[g]になるのは変わらなかった。これに対して、この世代を経る間に /ai/ の融合形が [æ:] あるいはその変種から [e:] に変わったため、[a:] vs [e:] という違いに反映されると考えられる¹⁰⁾。なお、当然のことではあるが、語ごとの [æ~e] の出現数(表2の最下段の数値)は表1の融合形の率と一致した傾向を示している。

3. 2 /ui/

中舌母音の [i] のあるところでは、融合すれば [i:] が聞かれる。これに対し、

(1) 一地点ではあるが、[y] と表記するのが適当と思われる前舌円唇母音が聞かれた。

〔例3〕茨城県五霞村(5679.40)男(1907生)¹⁰⁾

古いから [ϕuɸy:kafa]

[y] は上野善道(1990ed)や金田一(1953)では愛知県尾張地方及び隣接する岐阜県の一部にのみ存在が報告されている。しかし中条修(1984)によれば、静岡市の一部地域に不安定であるが存在するということであるし、新潟県新発田市にもあるらしい¹¹⁾。連母音の長音化の過程で各地で別個に発生する可能性のある音声と思われ、[i:] に変化して短母音 [i] と同じ音声へ集束してしまっている現在の状態以前に、この地域に存在していたとしても不自然でない。しかし実際には1例のみで存在しないに等しいのは、/ai/ /ae/ 等よりも早い時期にこの変化が終了しているからだと考えられる。

この地方の /u/ の丸めは強くない。基本的には同化現象として説明されるべき連母音の融合形において、なぜ元の母音にないほど円唇性が強調された音声([y])が聞かれるのか¹²⁾説明されなくてはならない。連母音の融合における中途の段階では、いまだ本来の音声の違いを弁別しようとする力が働いているはずであり、したがって、例えば /oi/ /oe/ 出自の [e:] との弁別を際立たせるために、融合形において唇の丸めが強化されるといった事情があるのであるまいか。

(2) 「暑い」について「ツイ」が「ツー」となる現象が観察された。2地点に過ぎないが、調査地中最も羽生市に近い地点(大利根町: 5678.15 と菖蒲町: 5678.73)であり、羽生市からこの地点あたりにかけてこの現象の分布している可能性がある。今後の調査で確認したい。

3. 3 /ie/

「見える」「消える」は /Cieru/ という音連鎖と思われるが、融合した結果 [i] は全く現れず、報告のある [e:] のほかに、狭い [e:] や、更にずっと狭い、[i:] と表記すべき音声¹³⁾が聞かれた。/oi/ /oe/ 出自の [e~e] に対し /ie/ 出自の [i:] が区別されるとすれば、/miRru/ をたてる必要が生じる。

ここで、2.1の最後に残しておいた母音単独拍において /i/ /e/ 両方をたてるべきかという問題について考えたい。この地域において本来 /i/ = [i] であり、この地域の狭い /e/ と近かったため、母音単独拍における /i/ と /e/ の混同が起き易かったのではない

か。東北方言においても音韻環境によっては母音単独の /i/ /e/ に識別があるという考え(飯豊1984a)もあり、母音単独拍の /i/ /e/ は完全に合流したのではなく僅かな識別の残った状態にあると思われる。従って「指」「海老」などの [ibi]~[ibi] という語形は /ibi/ と解釈される。これに対して CV 拍の(また母音単独拍にも時に現れる)方の /i/ は、/e/ との混同を避けて中舌化する方向へ「逃げた」。この結果 /i/ の短母音 [i] と、/i/ の長母音 /iR/ [i:] は別音となり、もう一つ、短母音にない母音が融合現象によって増えたことになる。多くの地域で [ɛ:]~[e:] に変化して /oi/ /oe/ との区別を解消したのも、短母音との音声的ずれのためであろう。

3. 4

連母音の融合によって新たに短母音にない母音が生じ、母音の体系が崩された。この時点で、/ai/ /ae/ と /oi/ /oe/ は対立を保っているが、例えば /ai/ /ae/ には [æ:]~[æ:]~[æ:] などの変種があり、それぞれが臨時的な実現に過ぎなかった。/oi/ /oe/ や、/ui/ /ie/ 出自の母音も最初はそれぞれの弁別を優先して異化を図り、その過程でさまざまな変種や中間的な音色の母音を生んだことが予想される。これらの母音は、本来の短母音の中にない音であるため体系内に安定した位置を占めることが出来なかった。結局、一時的な現象にとどまり、短母音の長音に変化することにより、元の5母音体系に集束した。この過程で、/ai/ /ae/ と /oi/ /oe/ さらに /ie/ は対立を解消した (/eR/ に合流した)。現在、埼玉県東部地域はこのプロセスがほぼ終了した状態にあるものと思われる。

4. 長音の短呼

連母音の融合によって長母音が生ずるはずのところが、短めあるいは完全に一拍分で発音される現象が東部地域のほぼ全域で観察された。

〔例4〕三郷市彦成(5689.94)男(1922生)

「帰ってくる」って言わないで「けってくる」ってね。

[kaɛ.tte.kuɸutte.iwanz.deke.tte...] (ae も一拍分)

金田一(1943 p.208~)では茨城・栃木地方(及び千葉の一部)に見られる現象であり、埼玉は「大体完全な長音節を有する地方」とされておりこの現象の指摘を見ないが、埼玉県東部に関しては認められるべき現象だと思われる。

この地域の話者にはもちろんモーラ感覚があり、促音、撥音ははっきりと一拍分に発音される。したがっていわゆるシラビーム方言とは言えないものだが、特殊音節の全てを分析しない音節構造を持つ方言を完全なシラビーム方言とすると、モーラ方言からそれに少しずつ近づく段階があり、位置的にも埼玉県東部がその最初の段階にあるものと考えられるのではないか。現代諸方言のいわゆるシラビーム構造を古代語の特徴の残滓と考える見方を否定する考えが近年見られるが(例えば木田章義1988)、埼玉県東部のこの現象を、東北方言的な音節構造を発展させてゆく端緒であるとすることはできないかと考えている。

5. 地理的分布について

東京に近くても東南部の地域は中舌化の傾向が強い。また、[æ~ɛ]も南部の浦和、三郷、吉川などに見られる。東武伊勢崎線沿線ではない東南部地域（越谷・草加の町場以外、八潮、三郷、吉川、松伏等）には、かなり古い特徴が残っているという傾向を指摘できようかと思う。井上・加藤（1970）の「下流を横切る線」は埼玉県東南部よりも更に南だが、埼玉県東南部地域はそれと似た様相を呈するようである。一時代前には、この古い特徴の分布域はつながっていたのではないだろうか。これに対し、県東北部の伊勢崎線～日光線沿線の地域（杉戸～幸手～栗橋、恐らくは春日部なども）では中舌化しない傾向がある。またこれは[æ~ɛ]の現れない地域の分布についても概略当てはまる。母音現象について見た東北方言の性格の東京語の侵入による後退は、日光線沿いに幸手辺りまで入り込んでいる。これは金田一（1943）の調査時にはまだ見られず、戦後顕著になってきた新しい変化であろう。更に北の日光線から直接に影響を受けない地域になると、古い特徴の残存が復活する。JR 東北線（現宇都宮線）のもたらす影響は希薄のようだ。

したがって現在のこの地域の音韻分布は、古くは県北の群馬県との県境あたりから千葉県までつながっていた東北方言の音韻が、主に東武伊勢崎線～日光線を軸とした都市化に従って入ってきた東京の音韻によって分断された形をとっている、とすべきだと思われる。アクセントに関して井上（1988）にも「根本的なメカニズムは川と平行する交通路にある」という指摘があるが、東部地域において有力な「交通路」は具体的には日光街道に沿って走る東武伊勢崎線～日光線であることが明らかになったと思われる。本稿では子音や拗音やアクセントの問題に触れられなかったが、今より一時代前、埼玉県東部には東北方言の要素がより広く分布しており、更に東北的要素を強める方向での変化（例えばアクセントの曖昧化、いわゆるシラビーム方言化、母音の混同の進化など）の途上にあったのではないかと推測されるのである。

本稿は平成3年度早稲田大学修士論文「埼玉県東部の音韻とアクセント」の一部を1992年5月16日、早稲田大学国語学会で口頭発表したものである。調査にご協力くださった方々にこの場を借りて厚くお礼申し上げる。

[注]

- (1) 金田一春彦（1977）p. 170 の地図、及び p. 215 の記述など。
- (2) 『新編埼玉県史』別編1（埼玉県 1988）附録の明治28年の「埼玉県管内全図」を参照した。
- (3) ユ>イの変化の調査項目「鮎・薺」は「一ユ」のままの語形もあるが、ユがイに変化する場合、語尾に連母音 /ai/ を生じ、さらに融合形も現れるので、結果としてこの項目にも含まれることになる。
- (4) 大橋（1974）によれば、県内では北部の羽生市（地図の左上方）にみられるとのことである。
- (5) 「(a)融合形が得られた地点÷(b)調査地点」の百分率。(a)には非融合形と融合形が並存

する地点も含めた。それぞれの項目ごとに未調査の地点もあるので、(b)の数値は必ずしも全調査地点と同じ63にはならない。

- (6) 篠崎晃一(1991)によれば、千葉県鋸南町では ae の融合が盛んだが、「苗」は融合しない例に挙がっている。篠崎氏は「無い」(の融合形)との同音衝突を嫌ったため、と推測されているが、鋸南町が漁村であることとの関わりの方がむしろ重要なのではないだろうか。
- (7) 例えば B であれば、B 本人以外に A や 1902 年生 1905 年生などの話者も含めて 1906 年以前に生れた話者が 6 人いたことを示す。
- (8) [æ:] が [ja:] に変化し易いことについては中条(1984 p.53) 参照。
- (9) 茨城県ではあるが、県で唯一利根川より西にあり、また、アクセントの調査でも崩壊は進行しているものの埼玉系アクセントであることが確認された。
- (10) 早大国語学会の発表における質疑の際ご教示いただいた。
- (11) 他の [y] の存在する地域でも同様だとのことである。
- (12) 井上・加藤(1970)にも、市川と取手について eR の他に iR の報告がある。
- (13) アクセント調査についても平行した結果がえられた。
- (14) 井上・加藤(1970)の「中流では現在の利根川あるいはそれより東北まで東京的音韻が張り出して」いるという井上・加藤(1970 p.172)の記述とも整合する。

〔参考文献〕

- 新井寿郎(1964)「埼玉の養蚕地域の変貌」(『埼玉大学紀要 社会科学編』12巻)
- 飯豊毅一(1984 a)「東北方言における「イ・エの混同」と「シ・スの混同」」(『現代方言学の課題 第2巻』明治書院)
- (1984 b)「関東方言の概説」(『講座方言学』5 国書刊行会)
- 井上史雄(1984)「埼玉県の方言」(『講座方言学』5 国書刊行会)
- (1988)「荒川流域の方言」(『荒川 人文Ⅲ—荒川総合報告書4—』)
- 井上史雄・加藤正信(1970)「利根川流域の音韻」(『人類科学』22巻)
- 上野善道他(1990ed.)「方言音韻総覧」(『日本方言大辞典』小学館 付録)
- 大橋勝男(1974)『関東地方域方言事象分布地図 音声篇』(桜楓社)
- (1989)『関東地方域方言の方言地理学的研究 第一巻』(桜楓社)
- 小野文雄(1971)『埼玉県の歴史』(山川出版社)
- 木田章義(1988)「日本語の音節構造の歴史—「和語」と「漢語」—」(『漢語史の諸問題』別冊 京都大学人文科学研究所)
- 金田一春彦(1943)「関東平野の音韻分布」(『方言研究』第8輯)〔『日本語方言の研究』(東京堂1977)再録〕
- (1953)「音韻」(『日本方言学』吉川弘文館)
- 篠崎晃一(1991)「千葉方言の音韻分析」(東京都立大学方言学会 発表資料)
- 中条 修(1984)「連母音の融合に関する諸相の考察—静岡市方言を中心として—」(『現代方言学の課題 第2巻』明治書院)